

満洲、中国大陸、東南アジア、南洋への伝道

はじめに、本稿の「満洲」は1932年建国の「満州国」ではなく、満洲族の居住地であった「満洲」のことである。

朝鮮半島、台湾に続いて天理教伝道がなされたのは満洲であった。厳密には北米、ハワイ、ロンドン伝道もほぼ同じ頃であったが、これらはごく一部の人による伝道でその後続くものではなかった。その点、満洲は明治末から伝道が始まり、大正、昭和初期へと続き、伝道に連続性がある。

満洲に最も多くの教会を設置するのは越乃國一本島一京城系である。前号にも記述したが、京城の伝道は朝鮮半島各地に伸び、さらに熱心な信仰者たちによって満洲へ伝道される。

大正2年(1913)から3年にかけて児島辰次郎、せん夫妻は大連へ、続いて小野亀次郎が奉天に、江口栄太郎、はる夫妻も最初大石橋で布教する予定で出発したが、もっと大きな街へ行こうとさらに北にある遼陽を伝道地を選んだ。

児島、小野、江口らは本島の片山好造の激励を受け満洲各地に飛び出したが、当時の満洲は清朝が倒れ中華民国に移る頃で、暫くは群雄割拠、不安定な地域だった。大きな街にはかなりの日本人も住んでおり、京城の伝道者たちはまず都市に住む日本人へ向けおたすけ活動を行った。

江口は大正3年遼陽宣教師(現満洲分教会)を設立、児島も同5年に関東宣教師(現満洲関東分教会)を設立した。大正4年の大晦日、片山は遼陽宣教師に集まった信者たちにおたすけに出よう促した。片山の話を受け幸重カン、永井サイ、波田野定吉、和田千代らの人たちがそれぞれ公主嶺、鉄嶺、四平、ハルビンへと伝道に赴き、後に教会を設立する。またハルビンで信仰に入った人たちの中から満洲の北の果て満洲里やシベリアのチタ、ロシア領沿海州にまで布教する人が現れる。

この伝道者たちには女性が多かった。満洲の地は昭和7年(1932)満州国建国までは自衛集団から匪賊化した馬賊などが勇躍し、気候も厳しく生活するのさえ大変だった。こんな時代に女性が単身で北満からシベリア、沿海州まで布教に歩いた。一体どんな状況だったのだろう。なぜ危険を顧みず、そこまでしたのだろう。この事実を現在の私たちは忘れてはならない。

昭和11年『教会名称録』に記載される満洲伝道所管の教会は沿海州を含め75カ所。うち京城系が30カ所に及ぶ。

次に京城系以外の伝道として中津一直入一安東宣教師と高知一厳原一撫順宣教師を取り上げる。

大分県直入布教師(現大分市分教会)の高部直太郎は布教師の債務返済のため明治38年満洲の安東に赴き、夫人と共に懸命に働いた。3年におよぶ努力の甲斐あって負債も落ち着いたもので、高部夫婦はその場で布教を始めた。上級に尽くしきった情熱がおたすけに向かうと、あちこちで不思議な守護が現れた。高部は明治43年教会設立の願書を教会本部に提出したが、当時はまだ「海外布教規定」が制定されていなかった。規定はその年11月に制定され、翌44年に安東布教師(現安東分教会)が設立され、満洲で最初の教会となった。

高知系厳原支教会(現分教会)の波田伝次郎は明治44年、満鉄に入社、満洲の撫順に渡った。次第に、この教えは自分一人の為にあるのではないと感じ、長女の身上から道一条を決意、満鉄を退社、大正7年撫順教会を設立した。撫順からハルビン、新京、奉天、大連などにも伸び、部内教会が設立された。

満洲以外の中国大陸では戦前に、30カ所余りの教会が出来た。上海、青島に多く、天津、香港などにもある。その中、特徴的な赤峰教会(現分教会)と崇文教会(同)を見よう。

昭和9年、本島の布教師向所忠夫は蒙古伝道に出発。日本語教師をしながら土地の有力者を信者にした。その有力者が何十人、何百人もの人を連れ、入信させたという。向所は人間とし

てもスケールが大きく、やがて万を越す信者になり、昭和15年内蒙古に赤峰教会を設立した。

昭和3年天理外国語学校北京語第1回卒業生に河原町大教会の佐藤軍紀がいた。佐藤は卒業後天津伝道所勤務し、すぐ北京に向かった。布教当初から中国人の、しかも社会の底辺に住む人たちを助けた。昭和6年結婚し夫婦で中国人布教につとめ日本語学校も開いた。たくさんの中国人信者が協力し昭和11年、崇文教会が設立される。

次に東南アジアと南洋の島々について書く。南洋とはミクロネシアの島々である。そのほとんどは大正9年(1920)日本の統治下に入り、パラオ諸島コロールに日本の南洋庁が置かれた。次第に日本人が移住し、天理教布教師も渡りようになる。

東南アジアと南洋において第二次世界大戦前に設立された教会はシンガポールに1カ所、フィリピンのミンダナオ島に2カ所、ジャワ島に1カ所、パラオのコロール島とペリリュウ島に各1カ所、テニアンに1カ所、合わせて7カ所である。

東南アジア、南洋とも日本との関係が深く、日本人移住者が多かった。明治37年、南海分教会(現大教会)の青年たちが出稼ぎにフィリピンに渡ったが、濱口丑松は伝道目的を明確に持っていたという。この時代、秘密訓令の影響などにより各教会は大なり小なり財政的に苦しい時代だった。

ちょうどフィリピンでは大きな道路工事で人手が必要だった。日本人は真面目に働いたが、劣悪な環境で多くの犠牲者も出した。濱口は暫くして馬尼ラ集談所を開設しおたすけ専門になった。南海の人たちが帰国した後も濱口はマニラにとどまった。その後集談所は甲府系北越支教会の高野馬治郎、さらに小川ミネに引き継がれた。

ミンダナオ島ダバオには昭和4年、本島系本宮寛が布教を始めた。本島の会長片山好造の船員伝道構想を船員だった津野兼盛が実施に移し、さらに津野の弟子本宮が継承しダバオに伝道した。ダバオはマニラ麻の開拓で多くの日本人が移住していた。労働環境は悪く、本宮はおたすけが必要だと考えた。昭和7年ダバオにフィリピン教会を設立した。

本宮の後、日光系塚本義輝が昭和6年ダバオに布教した。マニラ麻の仕事をする北洋系信者宅の一室を借り、奥地の原住民にもおたすけを試みた。昭和10年ダバオ教会設立。ダバオの2教会は協力し、全教一斉ひのきしんデーなどで人々を喜ばせた。

シンガポール布教に身を捧げた生駒系布教師板倉タカは入信前、自由奔放に生きていた。入信後はそれまでを反省しおたすけに生きる。明治45年マレー半島で布教を開始するが、大正5年教祖30年祭帰参の時、真柱ご母堂から、やさしい犒いの言葉をかけられ感激する。シンガポールで苦勞の都度ご母堂の言葉を思い出した。日系新聞からの攻撃にも耐え数々の不思議な守護を見せられ、大正11年新嘉坡宣教師を設置した。東南アジア、南洋では最初の教会である。

昭和3年、東肥系阿蘇支教会(現分教会)の佐藤嘉一は兄の奨めで南洋布教を志した。夫婦でパラオ諸島コロールでおたすけし、その年の内にパラオ教会を設立した。教会設立に際し、兵神大教会清水芳雄が海外伝道部の立場からパラオを訪れ、佐藤を激励すると共に自らもおたすけに歩いた。しかし僅か2カ月ほど後、風土病に倒れ出直してしまう。

清水の意志を継いで兵神から近藤藤三郎がパラオのペリリュウ島に布教し、昭和8年ペリリュウ教会を設立する。

その他、ジャワ島にジャバ島教会(昭和12年、熊本系)、南洋にもテニアン教会(昭和12年、高安系、高橋ひさ)があった。日本統治下にあったとは言え、ミクロネシアの島々までおたすけに歩いた布教事実は後世に伝えねばならない。